
大学卒業後

星野いちろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大学卒業後

【Zコード】

Z3851D

【作者名】

星野こひろひ

【あらすじ】

大学卒業後、就職したが、退社願いを出し、旅に出て、また、仕事を自力で一からやり直ししようと。しかし、実家に帰らなくてはならなくなる。

統合失調症になつた僕「大学卒業後」

無事、大学を卒業し、12月には就職先が見つかり、新しい病院も見つけずに、大分県三重町へ向かった。

しかし、薬を飲んでいなかつたので、仕事中、幻覚、幻聴の症状があるまま仕事をしていた。勿論、仕事は、中途半端な状態だつた。

そして、夕方、自動車教習所に通い車の免許を取つた。

一年後、大分市内に転勤になつた。しかし、幻覚、幻聴がある為に、仕事をまともに出来ず、知らぬ間に隅つこの方に追いやられ仕事が出来なくなつた。 三重町にいる時、阪神淡路大震災があつたのと、仕事がまともに出来ないのが理由で総務課長から

「実家に帰りなさい。」と言われ、退社願いを提出した。しかし、実家には帰りたくなかった。もう一度、仕事を一からやり直したかつた。そこで、とりあえず、車に荷物を放り込み賃貸マンションを出た。 まず、九州全県を回つた。寝泊まりは、車の中でした。また、夜も寝ずに車を走らせた事もあつた。そして、本州に渡り、高速に乗つて東京へ向かつた。夏の暑い時で、力 エアコンをガンガンにきかせて走つていた。

退社時の貯金が36万円あつたので、それで食費とガソリン代をまかなつた。

東京に着き、夜の首都高を突つ走つた。そして、源義経を思い出し、東北へ向かい、車の中で自殺しようかとも考えた。しかし、自殺する勇気はなかつた。結局、日本を車で縦断した。どの土地へ行つても幻覚、幻聴は消えず、外にいる人の声（幻聴）が聞こえてきたりした。

「精神薄弱者だな。」という交通警察官の幻聴が聞こえたりもした。 力 ラジオで気を紛らわしていた。ある時、大阪で駐車していると、 ZARDの

「負けないで」が聞こえてきた。

そして、とうとうしびれを切らし、神奈川のコンビニに入り、賃貸住宅情報誌を買い一番安い所はないかと探すと、千葉県九十九里町に月三万八千円のアパートが見つかった。お金のなかつた僕は、九十九里町のパン屋に寄りパンのみみを分けてもらい、それでなんとか食べ物には困らなかつた。

アパートに住む為に、父親に公衆電話で連絡しお金を銀行に振り込んでもらい、なんとか、そのアパートに入居した。固定電話があつたので、アルバイト情報で仕事先を探した。まず、人材派遣会社にあたつた。

雇われた僕は、福山通運で荷物の仕分け作業をしたが、幻覚、幻聴のあつた僕には、できるはずもなかつた。

主任に叱られ、これは自分には出来ないと判断した僕は、直ぐに辞めた。

そして、しばらく、アパートで水だけの生活をした。
水を食料に、中小企業診断士の勉強をした。

しかし、いい加減、水だけの生活に疲れ、また、バイトを探した。
S引つ越しセンタが見つかつた。幻覚、幻聴の中で、仕事をこなしていくた。体の大きかつた僕は、この仕事は続けられる、と思い、しばらく続けたが、アルバイトの僕には、電話をしてもなかなか仕事が入らなかつた。そして、とうとう、実家に電話をし、10月13日に帰るから、と父親に言つた。

わずかな小銭と、大きなスポーツバッグを背負いアパートを出た。千葉駅でラーメンを食べ、電車に乗り、持ち金、全部はたいて上野駅まで行つた。

ホ ムレス

10月の寒い中、大きなスパートバッグを背負いワクワクでひたすら歩き続けた。しかし、あまりにもスパートバッグが重過ぎたので、バスタオル一枚取り出し、スパートバッグは、空き地に捨てた。夜も寝ずに、ひたすら歩き続けた。もちろん、幻覚、幻聴はつきまとう。おばさんの声で

「電車の車掌をやつたらどうだろ?」そんな幻聴が聞こえてきた。途中、バス停に座り、バスタオルをかぶり、百円ライターに火を灯し温まつた。寒かった。大井川の川原を歩いていると頭の中で、「尾崎豊」の

「俺が這いつぶやむのを待つてる全ての勝敗の為」と聞こえた。前に見える山並みが綺麗だつた。そして、また、歩き続けた。熱海に着いた。海岸沿いの車道を歩いているとカツブルがなにやら寝転んで絡み合つていた。全く気にせず、歩き続けた。山の中へ入つて行つた。すると、世界救世教の建物の入口があり、

「工事中の為入ません。」と書いてあつた。山道を歩いていると、車が止まり

「乗つていきませんか。」と言われたが不気味だつたので断つた。
しばらく歩き続け、明け方

「小田原城跡」と書いてある所に着いた。

「ここなら何かあるかもしない。」そう思い、小田原城へ向かつた。すると、道端にタバコが何本か落ちていた。久々にタバコを吸い、味を思い出した僕は、シケモクを拾つて吸つていた。

小田原城に着いた。

夜までうろつろしていた。

そして、田の前に段ボール箱が積み上げられているのを見つけた。空腹で何か食料が欲しかった僕は、箱の中を覗くと、なんと、幕の内弁当が新品同様に六箱程捨てられていた。

急いで、それを、上まで運び全部たいらげた。

それから、がむしゃらに落ちていてる食べ物はないかと探し回った。

石垣の上にうどんの生麵が袋に入つて落ちていた。

僕は、おもむろにそれをとり、かぶりついた。味は、どうでもよかつた。空腹さえ癒されればと、また、城内を食料を求めて歩き回つた。色々と見つけた。片つ端から飲み食いした。そして、しまいには、ゴミ箱をあさつて食料を探し、見つけては胃袋に放り込んだ。もう人間としてのプライドなんかなかつた。虫けら同然だった。

ある夜、上に上ると動物園を見つけた。おりの中にネズミがたくさんいた。その中の一匹が、

「私がここに長老です。」と言つたように聞こえた。幻聴だ。そして、警備員が見回りをしていたので見つからぬように坂を降りて行くと、枯葉の入つたゴミ袋の山が積んであつたので、寒さをしぶるにその中に埋もれ一晩寝た。

日が覚めると、腕時計は5時をさしていた。そこから外へ出て、海岸へ向かつて歩いて行つた。海岸に座つていると、そこでホームレスをしているおじいさんが、僕の所へ寄つてきて隣に座つた。僕は、

「どこから来たんですか。」と聞くと、

「真鶴の息子の家を出てきた。」と答えた。

「こつちにおいて。」と言われ、ついて行くと、青いビニールの小屋があり、その中へついて行くと、おじいさんは、収納ケ

「ブリヂストンの赤いジャンパー」を出して僕にくれた。

「すみません。」

それを着て海岸沿いに移動した。海に浮かんでいる自衛隊の船を眺めていると日の前にトンボが止まつた。首を振り、僕に攻撃してきた。僕は、逃げた。

「トンボにまでばかにされている。」

その夜、小田原駅に行つた。一人の女の子が男共に囲まれていた。何をしているのかわからず、僕は、近くのミスター・ドーナツの

裏口から階段を上り、出口に食べかけのドナツがたくさん入った袋を見つけた。店員に

「この袋くれませんか。」と言つと断られた。もう少しで、贅沢な食事にありつけることができたのにとガッカリした。そして、また、小田原城へ戻つた。すると、駐車場に

「寺内タケシ」と書かれたトラックが、止まっていた。どうやら、ミユジシャンらしい。僕は、池の淵の柵にもたれ池を覗きこんでいた。すると、一人の男が声をかけてきた。適当に会話を交わし、その場を離れた。雨がポツリポツリと降つてきて一気にザツと降つてきた。僕は、雨の中、バスタオルをかぶりしゃがみこんでいた。幻聴が聞こえてきた。父方のおばあちゃんの声だった。僕は、一体、何をしているんだろう。誰かに助けを求めたかったが、どうにもならなかつた。しばらくして、雨がやんだ。灰皿のシケモクはびしょびしょに濡れて吸うこともできなかつた。下では、暴走族が車をビュンビュン走らせている音がしていた。恐くて上方へ登つて行き、しばらく息をひそめた。しばらくして、静かになり太陽がのぼってきて空が白み始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3851d/>

大学卒業後

2010年10月19日20時58分発行